

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百五十五回 マルクス・レーニン思想の破綻（その五）

南出喜久治（令和6年11月1日記す）

### 【マルクス主義の本質 その1】

最近は、「除名」といふ言葉が踊つてゐる。

少し前の例だと、神真都Qでは、倉岡、京極、井上智恵の除名がある。そして、日本共産党（日共）では、松竹伸幸、鈴木元の除名、参議院ではガーシー（東谷）の除名である。もとと前だと、自民党でも池田利恵の除名があつた。

国家ではない任意団体である神真都Qや日共、自民党などの場合は、組織の秩序を乱す行為に対して排除することは認められる。それが理不尽なものであつても、我が国では、憲法には何の根拠もない「部分社会論」がまかり通つてゐるために、団体の自治の名で除名を許すことを認める場合が殆どである。

結社の自由といふのは、原則として団体の保護が優先し、個人の保護は劣後するといふ運用がなされてゐるからである。

除名される具体的理由は様々であるが、刑罰などの強制力を行使できる国家の場合は、それが民主国家、自由国家であれば、思想による排除は許されない建前になつてゐる。だから、ガーシーの場合は、ガーシーの政治思想を理由として除名したのではなく、素行不良を理由としたものであるから許されるのである。

ところが、旧ソ連だけでなく、現在の中共、北朝鮮などでは、思想による排除がまかり通り、除名は処刑と不可分一体のものとなつてゐる。

これがマルクスが「共産党宣言」で述べた「プロレタリアート独裁」の必然的な帰結であり、共産主義に反対する反革命思想の者は、当然に排除されて処刑される専制主義がまかり通つてゐる。これは、思想弾圧しなければ体制が維持できないためである。

確かに、マルクスは、資本主義の分析には長けてゐた。

その洞察力によつて資本主義の本質をあぶり出した点は評価できるが、その分析から演

繹しうる解決策が完全に誤つてゐた。

といふよりも分析力はあつても解決案を編み出す構想力に欠けてゐた。これは学者としての限界である。

マルクスは、「資本論」だけでなく、その生涯で沢山の著述の論考を残したが、年代によつてまちまちの分析がなされ、しかも、解決策として述べたものには整合性、一貫性のあるものが一つもない。

昔から存在してゐた労働価値説をマルクスが採用したことは決して誤りではなかつたが、それと同時に、貨幣の本質、貨幣制度、通貨発行権、通貨発行利益の帰属主体など、貨幣（通貨）について全く考察しなかつたために、労働価値説は単なるお題目で終はり、労働力を貨幣評価することの本質に迫ることができなかつた。

しかも、稀代の占ひ師のやうに、よからぬ予言をやりすぎた。

史的唯物論（唯物史観）、弁証法的唯物論、革命必然説（自由貿易による資本主義社会の成熟によつて世界における革命状況の出現し、革命は世界的に必然的に起こること）、窮乏化理論などである。

しかし、これらは後世において悉く否定された。

そして、ことごとくマルクス主義に綻びが生まれ、理論的に破綻したのである。